慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スポーツを通しての人間形成
Sub Title	Development of human character through sports
Author	竹中, 正一郎(Takenaka, Shoichiro)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1966
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.6, No.1 (1966. 12) ,p.5- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00060001-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スポーツを通しての人間形成

竹　中　正　一　郎*

ここに課せられた論題に入るに当って，「スポーツとは何か」についての私の見解を明らかにしておく必要があろう。何となれば，スポーツという独特な人間活動に対して，或る人は，健康の保持，体力の向上，更に精神陶冶等，甚だ多面，かつ有益な目的のために行なうものとの見解を抱くかと思えば，他方では，単なる趣味娯楽に過ぎぬものと見做すと言う風に，その本質は容易に理解され難いからである。スポーツの定義は，今日まで極めて種々な言葉で言い現わされ，現今もなお無数の議論が行なわれているが，その中で私は，ベルナール・ジレが，その著「スポーツの歴史」で最も簡潔に述べているところの，「スポーツは遊戯活動に外ならず，しかも遊戯とは完全に無目的な，強いて言えば，その活動自体の快楽を目的とする行為であり，その故に第一義的，創造的，従って最も厳粛にして純粋な活動である」という見解に対して共感を覚えるのである。

スポーツの無目的性は一応認められてはおりながら，これを口にする人といえども，とかく物質面のみを重視する如くに見える。しかし，真の無目的においてはそれに留まらぬ筈である。例えば，若し健康或いは体力の向上を目指してスポーツを行なうとすれば，それは既にスポーツではなくて体育と言うべきであり，またもし何等かの精神的効果を期待するとなれば，これまたスポーツではなくて，スポーツの形式を借りたいわば修養法であり，さもなくば体育の中で取り上げられるスポーツ形式の運動種目即ち教育手段である。即ち，それ等には遊戯の要素は無く，もし有るとしても第二義的で甚だ稀薄である。従ってこれはスポーツの必須的性格を欠くものと言うべきであろう。たとえ健康に逆行する可能性や，傷害の危険性があろうとも，更に，万一既成道徳の規準に照して悪徳を媒介すると見做されるかも知れないものであったと仮定しても，ひたすら愛好するが故に止み難い意慾に駆られて行なうのがスポーツである。即ち，スポーツという行為は善でもなく悪でもない。そこに真の無目的性が存する。

モンテルランがこれを，「外見上最も失望させる様な目的を持った，議論の余地なく，疑問の彼方にある活動形式」と言ったのは正しい。

---

* 慶應義塾大学体育研究所講師

マラソン走者が，あの厖大な距離を走る事は，医学的立場から見て恐らく健康のためには逆行的な行為であろうし，拳闘やラグビーやサッカーの選手はあらゆる瞬間に傷害の危険に晒されている。これ等は顕著に目に触れる例に過ぎないが，総てのスポーツは，どうせいずれはこれと同等の要素を備えている。それが明瞭でありながらしかも人は敢えてこれを行なうのである。スポーツマンは常人よりははるかに摂生を重んずる事は事実である。しかしそれは必ずしも健康が目的ではなくて，勝つための手段の一つである。禁酒禁煙を守り，暴飲暴食や夜更かしの習慣等を厳しく自戒する事は，それが摂生の美徳であるからではなくて，活動力の減退を恐れるからに外ならぬ。近代の練習には一般に医学上合理的とされる方式が採用されつつあるが，これは健康保持が目的ではなくて，そうする事が結局技術向上の早道である事を知っているからである。スポーツ選手の多くは，やがて，体育や一般健康法では到底達し得ない，遙かに常人に擢んでた健康と体力を獲得するであろうが，それはいわば偶然の結果であって，スポーツマンの目指すものは，ただ，「勝つ事」以外の何物でもない。いかに技術・体力が秀でていようとも，勝つ事への，この情熱を失ったとき，彼は最早やスポーツマンではない。スポーツマンの真価は，勝敗の結果によってではなく，勝たんがためにいかに全能力を傾倒し，その活動自体の中にいかに没頭したかによって決せられるのはこのためである。

スポーツの本質は遊戯である事には間違いないとしても，原始的な活動としての遊戯から区別されるためには幾つかの条件があるが，その最も重要なものの一つは，「系統ある練習」の過程を経る事である。日常，練習経験のない者が，運動会の 100米競走を，いかに正規の服装をし，正規のルールに従って走り，しかもいかに優れた記録を出そうとも，それはスポーツではなくて，一般的に言う遊戯の域を出ないものである。これに反して，技術がいかに拙劣でも，また終生競技会に出場する機会を得なかったとしても，技術向上のために，即ち勝つために，あらゆる方法を研究し全能力を傾けてその実行に着手した時，彼はスポーツマンとなったのである。その行為は，一種の自己表現の衝動であるから，誰もこれを阻止する事が出来ないと共に，その表現意慾の無い者にはいかなる強制的方法を以てしても，それを発動せしめる事は出来ない。スポーツコーチは，激励によって意気銷沈した選手の心の支えとなり，適確な指示を与える事によって競技者を昏迷と誤謬から救う事は出来ても，根本的に意慾を持たぬ者を練習に駆り立てる事は出来ないし，また，それはコーチの任務ではない。

スポーツは，恰も，公正，礼節，協同，規律，勇気，忍耐等数々の美徳を涵養せんがための活動の如く主張され，また一方においては，単なる暇潰しの娯しみと見做されてきたが，その本質に対する叙上のような見方からは，到底これ等いずれの結論をも導き出すことは出来ないと思う。

競技場裡において競技者は美事な協同動作を展開するが，彼等はこれによって他人と協同一

致の精神を養おうなどと心掛けてはいない。彼等の念頭にあるのは，ただ勝つ事のみである。競技者は総てルールに対して極度に神経質であり，時には極端にこれに拘泥しさえする。しかし，これを以て必ずしも公正の精神を養おうとする意識の発現と見る事は当らない。ルールを守るのは，お互いの身を危険から守り，スポーツの楽しみと，勝利の満足感が妨げられる事を防ぎ，しかも，それが勝つために最も有利である事を身を以て知らされているからである。球技の選手が身を挺して敵に突撃する場面は，観衆に感動的な印象を与えはするが，選手自身には，その行為の瞬間，勇敢に振舞うべきかどうかの判断の逞もなければ，それが勇敢な行為であったかどうかの自省もない筈である。彼の関心の一切は，そのプレーが技術的に成功であったかどうか，それが自軍に有利であったか否かである。未経験の人達はマラソン走者の忍耐と闘志を異常なものとして賞讃するが，走者をして忍耐的行為を敢えて継続せしめるものは，相手を征服し，或いは自己の記録を1秒でも短縮した時に味わう快感のイメージに外ならず，しかも苦痛が大きければ大きい程その快感も大きい事を走者は経験によって知らされている。さればこそ，一般の眼には徒労としか映じないこれ等の行為に積極的に挑み，その苦しみのさ中に快感を見出すのである。

作家の太宰治はある短篇作品の中で，駅伝競走を目撃した感想をその主人公に次の如く語らせる。

「とにかく力の浪費もここまで来ると美事なものだと思いました。……別にこの駅伝競走によって所謂文化国家を建設しようという理想を持っているわけでもないでしょうし，そんな理由を口にして走って，以て世間の人達にほめられようなどと思っていないでしょう……。家へ帰っても却ってお父さんに叱られはせぬかと心配して，それでも走り度いのです。命がけでやって見度いのです。無報酬の行為です。幼時の危ない木登りにはまだ柿の実を取って喰おうという慾がありましたが，この命がけのマラソンにはそれさえありません。殆んど虚無の情熱だと思いました……」

作家の眼は，さすがにものの核心を深く正確に捉えて誤らないと思う。

スタンドの観衆が競技者の行為から美的感動を受けようと，道徳的教訓を印象しようと，或いは軽蔑や嫌悪の念を抱こうと，もとよりそれは自由である。しかし競技者の心は本来これに対して何等の反応も示すべきではない。競技者と観衆は同一の場に在りながら全く別個の世界である。観衆は競技そのものをとかく美化して考え，その傾向に由来して，古来数々の美談がでっち上げられたのであるが，競技とはそんな表面的な綺麗事ではない。競技場とは，人があらゆる仮面を脱ぎ捨てて厳粛に相対する非情な場である。そういう意味でなら，むしろ何物よりも美的な場とも言い得る。

かつてのデヴィスカップ・チャレンヂマッチで，わが清水善造氏が米国のティルデンとの対

戦中，ティルデンがスリップしたとき，わざと緩球を返して，相手に立ち直るチャンスを与えたという事が，スポーツ史上有名な美談として語り伝えられているが，これが美談たる理由は清水氏が敵の不運の隙につけ込まなかった事が礼儀ある紳士的行為とされるにある。しかし，これは果たして礼儀ある行為であろうか。競技において，相手に対して払うべき最大の礼儀は全能力を以て立ち向う事である。

譲歩は相手に対する礼儀どころではなくむしろ非礼である。従って，清水氏がティルデンに対して礼を尽す意味でこの行為をしたと解して賞讃するとすれば，甚だ浅薄な解釈と言わざるを得ない。私もまた清水氏のこの行為に対して深甚の敬意を表するものであるが，それは清水氏が礼儀的であったからではなく，彼の「純粋な勝利の満足」への追求の熾烈さに対してである。即ち，たとえこの試合に勝ったとしても，突如として起こった相手の不運のハンディキャップを得て勝つ事は，自己の勝利感の純粋性を妨げる事を恐れたからである。少なくも私は，清水氏の心裡をこのように忖度し，その故にこそこの行為に千金の重きを感ずる。競技者は審判を神聖なりとして絶対服従の態度を示しつつも，実は最も信頼を置くに足る審判は自己にありと信じているのである。

競技のさ中における競技者は，観衆も，審判者も，遂には敵対者さえもない心境に立ち至るのが常である。スタートラインに立った競走選手の心境は正に孤独そのものであり，その時はじめて「勝つ」とは我自身に勝つ事なりという事を実感を以て知らされる。

一体，何が人をしてスポーツに向わせるかは，恐らくは心理学乃至哲学の領域に属する事で私の解し得るものではないが，ただそれを行なう事自体を快楽とする以外何の利益をも期待せずしかもなお已み難いこの独特な活動は，ともかく遠いギリシャの古えから人類の生活と共にあった事は事実である。

さて，このような行為が「人間形成」と果たして何等かの係わりを持つかどうか。

ここでわれわれは「芸術は遊戯である」というシラーの言葉を想起する。これを肯定する限りスポーツ活動と芸術活動は少なくともその発動の根源を一にすると言えるであろう。そしてここにわれわれははじめて「スポーツ」と「人間形成」の係わり合いについての端緒を見出すことが出来ると思う。

芸術と人間形成との間にはいかなる関係が存するか。この課題は，「芸術と道徳」という形で古来幾多の論議の行なわれるのを見て来たのであるが，私はここで，これ等専門外の領域に敢えて踏み入ろうとするものではない。しかし，私の如く，芸術に対しては極めて無縁な立場にある者ですら，芸術は，道徳も科学も規定し得ないもの，その遙か彼方のものを指向するものである事を知っている。もし，トルストイが，あの「芸術とは何か」の中で，強引で奇妙な論法を以て主張するように，芸術家が，道徳的或いは宗教的感化の使命を意識すべきだとすれば，

われわれはその作品から決して感動を受ける事はないであろう。

ここで私は，根源が遊戯活動という共通なものであるからといって，芸術とスポーツを同一の人間活動なりと主張するものではないが，少なくともこの二者の道徳との関連は同等のものであると信ずるのである。

体育の教師は実技指導の場で，規律や忍耐や協同等々を生徒に要求する。これは言うまでもなく教師が絶えず道徳教育的意識をその心裡に持つ事であり，また，これなくして体育は成り立たない。ところが，一旦体育の場を離れてスポーツの場に置かれた生徒達を観察するが良い。教師が千万言を費してなお能く果たし得なかったそれ等の要求が何の強制もなくたちどころに果たされるのを見るであろう。それは恰もわれわれが芸術作品から受ける感動に酷似しており，言う迄もなくこれは道徳という規制を遙かに越えた歓びの場である。第三者の眼から見て，たまたまそれが既成道徳の幾つかの徳目に叶っているとすれば，それはまことに幸いな事ではあるが，だからと言って，スポーツや芸術の目的が徳育にありとする論法は成り立たない。

低劣な鑑賞者が，芸術から道徳的悪影響を受けないとの保証が無いように，低劣なスポーツ嗜好者がスポーツによってスポイルされないとの保証もない。競技場での闘志の表現は一般社会での粗暴な振舞いと一見相似ており，規律と盲目的服従，決断と独断もまた甚だ紛らわしい外見を呈する。そして（これが最も深くスポーツの本質と関係を持つ事柄であるが）勝つために全能を尽す態度と，勝つと言う結果のみを重視する態度との微妙なしかも最も本質的な差異は外見からは容易に判別され難い。

結論として，「人間形成」なる言葉が道徳的価値を規準として言われるとき，これがスポーツと果たして関連ありや否やの問いに対して私は「イエス」とも「ノー」とも答え得ない。現に，私自身スポーツの体験から道徳的な何を得，何を失ったかを自らに問うてみて，答え得る何物もない。しかし，もし私がスポーツの体験を持たなかったと仮定すれば，決して現在の私自身は無かったであろう。これは確信を以て言い得る。この事は，スポーツが私の人間形成の上に，明瞭に或る役割を，しかもスポーツ以外には為し得なかった役割を果たすような何物かを媒介した事を意味する。その「何物か」とは何であるか。

これについて私は長い年月，折に触れては考えて来た。それはもとより，私一個の体験に照らしての事であるから，スポーツマン一般に適応するかどうかは疑問であるが，現在の段階で私の答えは「実利とは何の関係もないものに向って全精力と情熱を注いで悔いない心」という，ただそれだけである。

（三田評論41年7月号より転載）